

# 基礎看護学実習 I 前に実施した 時間外シミュレーショントレーニングの学生が認識した効果

The effect of overtime simulation training before first Fundamental nursing clinical training recognizes by nursing students.

吉川 由香里<sup>1)</sup> 藤野 ユリ子<sup>1)</sup>  
Yukari Yoshikawa Yuriko Fujino

## 要 旨

〔目的〕基礎看護学実習 I 前に実施した時間外シミュレーショントレーニングの学生が認識した効果を分析し、トレーニングの意義と今後の課題を検討する。

〔方法〕基礎看護学実習 I を控えた看護大学 2 年生を対象に「血圧測定と情報収集・指導者への報告」および「呼吸音聴診」の時間外トレーニングを実施した。その後、トレーニングに関する Web アンケート調査を依頼し、同意を得られた記述内容から学生が認識したトレーニングの効果の内容を分析した。

〔結果〕トレーニングには 7 回で延べ 98 名の学生が参加し、同意が得られた 85 名のアンケート調査表を分析した結果、「血圧測定と情報収集・指導者への報告」および「呼吸音聴診」の時間外トレーニングは実習で「役立った」と解答した学生が多かった。自由記述ではトレーニングに参加したことにより【実習への心構えができた】、実習では【落ち着いた行動】【スムーズな行動】【状態把握】【指導者への対応】ができ、【実習で効果を実感できた】ことが示された。

〔考察〕基礎看護学実習 I 前に、シミュレーション教育による看護技術の反復練習や得られた情報をアセスメントし、指導者へ報告するという過程をトレーニングすることは有意義であると考えられる。今後も継続して効果的なトレーニングが開催できるよう、学生と情報共有しトレーニング構成や内容を検討する必要がある。

キーワード：看護基礎教育、実習前トレーニング、シミュレーション

Keywords：Fundamental nursing education, Training before clinical practice, Simulation training

<sup>1)</sup> 福岡女学院看護大学

## I. はじめに

看護基礎教育において、看護技術の修得には臨地実習や演習等で経験回数を重ねることが重要である。

臨地実習では、対象者への人権配慮や安全確保の取り組み強化などにより、学生が看護技術を実施する上での制約が増加しており、経験できる技術は少なくなっているのが現状である。そのため臨床を再現した場面を活用したトレーニングが求められており、大学における看護系人材のあり方に関する検討会（2019）で発表されたモデル・コア・カリキュラムでは、シミュレーション教育の方略を活用した取

り組みの推進が述べられている。

臨床を再現したシミュレーション教育は、何度失敗しても繰り返し練習ができ、学生の経験不足を補い、自信をつける手立てとなると思われる。

このような背景から、A 看護大学では、2 年生対象に前期の基礎看護学実習 I を控えた時期に、時間外シミュレーショントレーニング（以後トレーニング）として、「血圧測定・情報収集・指導者への報告」および「呼吸音聴診」の 2 種類を実施した。

対象である A 看護大学の 2 年生は 1 年生前期に開講された基礎看護学方法論 I でコミュニケーションの概念やバイタルサイン測定に関する講義及び演

習を受講している。2年生前期の基礎看護学実習Ⅰで、実際の患者にバイタルサイン測定し観察するまでに約1年が経過しているため、授業や演習で学んだ知識や技術を失念している可能性は高い。基礎看護学実習Ⅰに備えて、個人もしくは学生同士で互いにバイタルサインを測定、呼吸音を聴診して自己学習を行っているが、測定できる回数や人数は少ないことが予測される。また、自己学習している全ての場面に教員が関わりアドバイスやフィードバックを学生に伝えることは難しい。

血圧測定に関する先行研究では、模擬患者へ実施する技術演習で、初めて出会う人への緊張や身体の違いへの驚き、練習の必要性の認識、成功体験による自信への繋がりなどが学習成果として報告されている(長峰,佐藤2018)。また、A看護大学で実施した1年生対象の血圧測定トレーニング「血圧測定100本ノック!」では、測定手順やコツの修得、コミュニケーション技術の向上などの学びが得られ、複数の対象者を測定することの意義も報告している(吉川,藤野2019)。

「呼吸音聴診」は、患者からの情報収集として、実習での実施率が高いが(寺山ら,2008;片野,2020)、自身の五感で判断するため、習得が難しく繰り返し練習する必要があると言われていた(東山ら,2018)。

そのため、本稿ではこれら2種類のトレーニング参加者の意見や感想から、学生が基礎看護学実習Ⅰを振り返り、トレーニングの効果として認識していることを抽出し、トレーニングの意義と課題を検討したので報告する。

## Ⅱ. 方法

### 1. トレーニングの対象者

2018年度前期に基礎看護実習Ⅰを履修する予定であるA看護大学2年生123名。

### 2. トレーニング目的

基礎看護学実習Ⅰに向けて、血圧の測定方法や患者とコミュニケーションをとり、アセスメントした結果を指導者へ報告すること、呼吸音聴診の知識・技術を習得することを目的としてトレーニングを実施した。

## 3. 日程の設定と参加者の募集方法

### 1) トレーニングの日程

(1) 血圧測定・情報収集・指導者への報告

2018年6月4日(2回)、8日、12日

(2) 呼吸音聴診

2018年6月14日(2回)、15日

計5日間、必須科目授業がない時間帯に90分のトレーニングを7回実施した。

### 2) 募集方法

- ①学内の掲示板へチラシを貼付
- ②該当する2年生全員へ案内メールを送信
- ③Webで参加受付

## 4. トレーニング方法

トレーニングの方法および進め方は表1～3に示す。血圧測定および呼吸音聴診は、全員が繰り返し実施し、教員の模擬患者からの情報収集シミュレーションおよび指導者への報告は、グループからの代表学生数名が実施した。

## 5. トレーニング評価

授業最終日にWebを用いた「シミュレーション教育の感想に関するアンケート」のうち、時間外トレーニングに関する評価項目の記入を依頼した。評価項目は、以下に示す。

### 1) 評価項目

- ①基礎看護学実習Ⅰの際に患者さんの呼吸音を聴診したか
- ②時間外トレーニング「血圧測定・情報収集・報告」は、実習に役立ったか《全く役に立たなかった:1～とても役に立った:5》を5件法、その理由は自由記述で求めた。
- ③時間外トレーニング「呼吸音聴診」は、実習に役立ったか《全く役に立たなかった～とても役に立った》を5件法、その理由は自由記述で求めた。

## 6. データ収集方法

入力したデータは基礎看護学実習Ⅰの成績評価が終了した後に、研究協力を学生に依頼し、同意が得られた学生のデータを分析した。学生に研究協力を

**表 1** 「血圧測定・情報収集・報告」トレーニング概要

【トレーニングの目的】 実習へ向けて、バイタルサイン測定・情報収集・指導者への報告方法を再学習する。  
 【対象学生】 2年生（希望者）  
 【トレーニング方法】 1グループ5～6人に分かれてグループ単位で実施する。

1. 血圧測定  
 (1) 参加者はA列B列と2列にならび、正面の2人がペアとなり向かい合って座る。  
 (2) A列は看護師役、B列は患者役とし、開始の合図でA列の看護師役はB列の患者役へ下記の対応を始める。  
     ①挨拶する②血圧測定することの許可を得る③影響因子の有無確認④血圧測定⑤血圧値のフィードバック⑥片付け  
 (3) 開始から3分経過したら、対応が終了していてもA列の看護師役は右隣へ移動し、新しい患者役の前に座る  
 (4) 再び開始の合図で、(2)の対応を始める。  
 (5) 3回対応を行ったら、看護師役と患者役を交代する。  
 (6) 患者役の学生は、看護師役の学生が行う(2)①・②・③・⑤に対し返答する。

2. 患者からの情報収集シミュレーションと振り返り  
 《事例設定》  
 2018年度2年前期に開講した「コミュニケーションリテラシー」でのシミュレーション演習事例と同じ、糖尿病患者とした。  
 《場面設定》  
 実習2日目の午前9時、受け持ち患者で個室に入院中のO氏の情報収集を行うために訪床したところである。  
 (1) グループの代表者が模擬患者(教員)とコミュニケーションをとり、情報収集するシミュレーションを5分間実施。  
 (2) 5分間振り返りを行う。  
 (3) (2)での振り返りを活かし、前回と異なる学生が再度シミュレーションを5分間実施。  
 (4) 5分間振り返りを行う。

3. 指導者への報告  
 シミュレーションで得られた情報を基に、指導者(教員)へ報告するシミュレーションを行う。

**表 2** 「血圧測定・情報収集・報告」トレーニングのタイムスケジュール

分	内容	ルーム 1	ルーム 2	ルーム 3	ルーム 4
5	オリエンテーション	全員			
15	血圧測定	全員			
5	説明・移動	全員			
20	血圧測定 シミュレーション・振り返り	4～9G	1G	2G	3G
20	血圧測定 シミュレーション・振り返り	1～3G 7～9G	4G	5G	6G
20	血圧測定 シミュレーション・振り返り	1～6G	7G	8G	9G
10	報告シミュレーション	全員			

**表 3** 「呼吸音聴診」トレーニング概要

【トレーニングの目的】 実習へ向けて、聴診方法を再学習し、呼吸音の正常と異常の違いを理解する。  
 【対象学生】 2年生（希望者）  
 【トレーニング方法】 1グループ5～6人に分かれてグループ単位で実施する

1. 知識の確認 (20分)  
 ・肺の解剖学的構造、聴診方法、正常な呼吸音、副雑音の種類と音

2. 聴診演習 (20分)  
 ・正常音：2人ペアになりお互いの呼吸音を聴診  
 ・副雑音：シミュレータを活用し、適宜グループを交代しながら、4種類の副雑音を聴診

3. シミュレーション (15分)  
 ・事例を提示し、シミュレータの呼吸音を聴診して状態をアセスメントする

4. 質疑応答・まとめ (5分)

依頼する際、アンケート調査表への記入は自由意志であること、個人が特定されることはないこと、授業評価とは無関係であることを伝えた。

調査期間：2018年7月17日～7月31日

## 7. 分析方法

同意を得られたアンケート調査表において、量的データは記述統計により傾向を分析した。自由記述については、記述内容から学生がトレーニングの効果として認識している内容を抽出し、内容のまとまりのある文節で区切り、コード化した。その後、類似性と相違性を検討して帰納的にカテゴリー化を行った。データの分析段階において、共同研究者と分析内容を照合しながら、再現性と信頼性を高めた。

## 8. 倫理的配慮

本研究は、福岡女学院看護大学倫理委員会で承認を得て実施した (No.18-5 (2))。

調査にあたり、研究参加者には研究の主旨と方法、利益と不利益、研究への参加は自由であること、個人情報保護および得られたデータは参加者が特定できない方法を用いて分析し、研究以外の目的で使わないことを口頭と説明書で説明し、同意書の提出をもって同意とみなした。

## III. 結果

トレーニングに参加した学生は、延べ98名であり、同意を得られた85名を分析対象とした。「血圧測定と情報収集・指導者への報告」トレーニングのみに参加した学生は18名、「呼吸音聴診」トレーニングのみに参加した学生は5名、両トレーニングに参加した学生は62名であった。

### 1. 実習での呼吸音聴診

基礎看護学実習 I において、患者の呼吸音を聴診した学生は、43名 (50.6%) であった。

### 2. 実習での役立ち

#### 1) 「血圧測定・情報収集・指導者への報告」

「血圧測定・情報収集・指導者への報告」トレーニングに参加した学生80名のうち、トレーニングが実習で《とても役に立った》と解答した学生は70名、《まあ役に立った》は9名、《どちらでもない》は1名であった。《どちらでもない》と解答した理由は、未記入であった。

#### 2) 「呼吸音聴診」

「呼吸音聴診」トレーニングに参加した学生67名のうち、トレーニングが《とても役に立った》と解

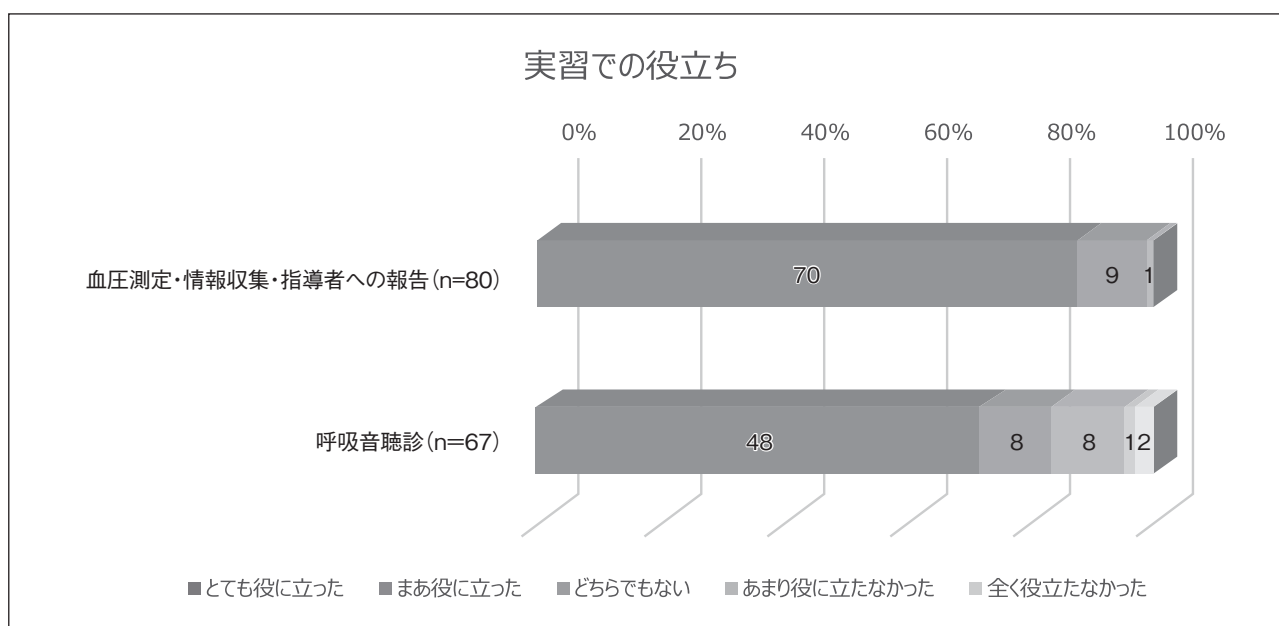


図 1 実習での役立ち

答した学生は48名、《まあ役に立った》は8名、《どちらでもない》は8名、《あまり役に立たなかった》は1名、《全く役に立たなかった》は2名であった。また《どちらでもない》・《あまり役に立たなかった》・《全く役に立たなかった》と解答した11名のうち、9名が〈実習で聴診しなかったから〉が理由としており、2名は〈実習で聴診しなかったが、学びは深まった〉と回答していた。

### 3. 学生が認識したトレーニング効果について

表4は自由記述の内容分析である。両トレーニングにおいて、実習に《役立つ》と解答した理由のうち、学生が認識したトレーニング効果に関するものが、117コード、9サブカテゴリー、2つのカテゴリーが抽出された。本稿では、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[ ]、コードを〈〉で表す。

【実習への心構えができた】では、[個々の課題解決][知識や技術の再確認][個別性の理解][自信の獲得][実習のイメージ化]から生成、トレーニングに参加して知識や技術を振り返ることができ、実習への心構えができたことを示していた。

【実習で効果を実感できた】では、[落ち着いた行動][スムーズな行動][状態把握][指導者への対応]から生成、トレーニングでの実践を実習で活かし、効果を実感していたことを示していた。

## IV. 考察

### 1. 実習での呼吸音聴診について

基礎看護学実習 I で、患者の呼吸音を聴診した学生は50.6%であり、片野(2020)と同様の結果であった。呼吸音聴診の実施率は、学年を重ねるごとに上昇していくが、その要因には呼吸音聴診や呼吸状態のアセスメントの重要性・必要性の理解が必要であると言われている。低学年から呼吸音聴診の必要性を授業や演習、トレーニングでも教授していく必要がある。

### 2. 学生が認識したトレーニング効果について

#### 1) 【実習への心構えができた】

今回トレーニングは、基礎看護学実習 I の日程に合わせ開催し、授業のない時間外であったが多くの

学生が参加した。また参加した人数により教員の数を調整し、グループ構成は少人数としたため、教員の目が届きやすく質疑応答しやすい環境であった。したがって、〈質問しやすかった〉〈わかりやすく説明して下さった〉〈近くにいた教員に教えてもらい疑問を解決することができた〉など[個々の課題解決]に繋がったと考える。

「血圧測定と情報収集・指導者への報告」トレーニングでは、模擬患者を設定し、学生同士が互いに相手を変えて繰り返しバイタルサイン測定をすることによって、〈手順や声かけなどどのようにすれば患者さんに負担をかけないか、練習する分だけ知ることができた〉〈手順をもう一度学ぶことができた〉〈様々な人の音を聴くことに対応できた〉など実感していた。船木(2011)は、血圧測定など技術は回数を経験するほど習得が可能であると述べている。吉川、藤野(2019)も看護大学1年生の血圧測定トレーニングにおいて、測定相手を変え繰り返し血圧を測定する機会を作ることは、技術習得に役立ったと述べており、今回看護大学2年生のトレーニングでも同様であったと考える。

「呼吸音聴診」トレーニングでは、シミュレータで副雑音を聴診したことによって、〈疾患による副雑音の違いを復習することができた〉〈副雑音の種類についても判断ができるようになった〉などの意見が聞かれていた。したがって、トレーニングに参加することによって、[知識や技術の再確認]や[個別性の理解]ができ、〈あまり自信がなかったが、たくさんの人の血圧測定ができ、自信につながった〉など、トレーニングでの達成感から[自信の獲得]に繋がったと予測できる。さらに、指導者への報告シミュレーションにより〈実際に病院で測ったときのリハーサルができた〉〈本物の患者と接するように練習できた〉〈どのように指導者、担当看護師に報告するのか分かった〉など、[実習のイメージ化]ができていた。学生は患者や看護師との初めてのコミュニケーションに対し、不安を抱えていることが予測される。鈴木らの調査(2020)では、7割の学生が看護師への報告に苦手意識を感じていると述べている。したがって、基礎看護学実習 I の前に、状況を設定した血圧測定や指導者への報告をトレーニングとして実施することは、学生の不安軽減にも繋

表 4 学生が認識したトレーニングの効果

カテゴリー	サブカテゴリー	トレーニング	コード	
実習への心構えができた	個々の課題解決	血圧測定・指導者への報告	ポイントをわかりやすく教えてもらったのが役に立った	
			不安だったので分からないところは先生に質問できるという環境で練習を行うことはとても良かった シミュレーションでバイタルサイン測定を練習して、友達や先生からフィードバックをうけたことで自分のできていないことが明確になった	
		呼吸音聴診	先生に質問しやすかった。わかりやすく説明して下さったので理解できた	
			自分が練習で聞いていた部位が本当にあっているのかを確認することができた 近くにいた教員に教えてもらい疑問を解決することができた	
	知識や技術の再確認	血圧測定・指導者への報告	解剖の復習が出来たと同時に基礎看護学など色々な復習ができた	
			一年生の時にしたこと、忘れていたので手順をもう一度学ぶことができた	
			バイタルサインの流れを再確認できた	
			手順や、声かけなどどのようにすれば、患者さんに負担をかけないか、練習する分だけ知ることができた 報告の仕方の練習が出来たので、言わなければいけないことが整理できた 看護師さんにコミュニケーションをとる方法ができた	
		呼吸音聴診	解剖生理学の復習にも繋がった	
			呼吸音の聴診部位をこのトレーニングをうけて確実に聞けるようになった	
			疾患による副雑音の違いを復習することができた	
			副雑音の種類についても判断できるようになった シミュレーターの音をよく聞けたことで断続性の～とか連続性の～などがわかるようになった 授業だけではほとんど理解出来ていなかったが、考えが整理できた 聴診器の押さえ方ができた	
	個別性の理解	血圧測定・指導者への報告	バイタルサイン測定を何度も繰り返し練習を行うことによって、様々な人の音を聴くことに対応できた 友達同士で血管の位置などなんとなく触知できるようになっていたが、一回ずつ別の人のバイタルが測れた	
		呼吸音聴診	人によって皮膚の厚さなどが違うので、色々な人の呼吸音を聞くことは勉強になった	
	自信の獲得	血圧測定・指導者への報告	バイタルの測定をたくさんしていたので、自信に繋がった バイタルサインの測定にあまり自信がなかったが、たくさん人の血圧測定ができ、自信につながった。 心の準備として練習することができてよかった	
	実習のイメージ化	血圧測定・指導者への報告	実際に病院で測ったときのリハーサルができた 患者役の詳細まで作ってくださっていて、本物の患者と接するように練習することができた どのように指導者、担当看護師に報告するのか分かった 報告の仕方や、看護師さんとの距離感などを知るきっかけとなった	
	実習で効果を実感できた	落ち着いた行動	血圧測定・指導者への報告	血圧測定時に緊張せずに行えた
				実際の実習でも、落ち着いて測ることができた 実習で自信を持って患者さんと測定することができた 実際に患者さんに測る機会があり自然と行えた
呼吸音聴診			バイタルサインを正確に測ることは戸惑うことなくできた 報告まで練習していたので落ち着いてできた	
			実習で実際に測定する機会があり、冷静に落ち着いて聴取部位を見つけ、聴取することができた 練習を行ったため、実習の際あわてずに聴取することができた	
スムーズな行動		血圧測定・指導者への報告	血圧測定を何回もおこなったことで実習の時にスムーズに会話をしながら行うことができた 実習の私の受け持ち患者さんはずっとベッド上で臥位になっている方だったから、寝た状態での血圧測定はとても役にたった	
			報告の仕方を学んでいたため看護師さんにスムーズに報告することができた 演習で報告練習をしていたため、当日に迷わず報告の内容をまとめることができた 報告の仕方や指導者さんと時間が合わなかったときの対応まで学べて、実際に実習で活用することができた	
			初めて正常値逸脱の状態を測定し、必要な観察項目を観察することができた	
状態把握		呼吸音聴診	実際に呼吸音を聴取した時に、正常か異常かを聞き分けることができた	
			呼吸音をしっかりと聴けて患者さんの状態を知ることができた 患者さんがどんな副雑音をしているかがわかった	
		指導者への報告	指導者さんからなぜ、そこを聞くのか質問されたときに習ったことが役に立った 報告の時に毎回気管音、肺胞音、気管支肺胞音、呼吸音の強さまで報告することができた	

り、【実習への心構えができた】と考える。

## 2) 【実習で効果を実感できた】

トレーニングを行った学生は、実習で〈緊張せずにできた〉〈戸惑うことなくできた〉〈スムーズに報告できた〉など、トレーニングでの実践を活かし、血圧測定や呼吸音聴診の際には、[落ち着いた行動][スムーズな行動]がとれていた。笹野ら(2021)は、臨地実習では不安や緊張で看護ケアが実践できない学生が多いと述べている。今回、学生はトレーニングで知識や技術手順を再確認したことにより、実習では不安が和らぎ、落ち着いて行動できたことが達成感に繋がったのではないかと考える。また、「呼吸音聴診」トレーニングで、学生がお互いに呼吸音を聴診することによって、聴診部位による呼吸音の違いや正常音を確認できた。またシミュレータを活用して副雑音を繰り返し聴診することで〈必要な観察項目を観察することができた〉〈正常か異常かを聞き分けることができた〉など、受け持ち患者の適切な[状態把握]ができ、アセスメントに繋がったと予測できる。さらに患者から得られた情報をもとにアセスメントし、[指導者への報告や対応]ができたことも示されており、トレーニングでの指導者への報告シミュレーションを思い出し【実習で効果を実感できた】ことに繋がったと考える。

## 3. 今後のトレーニングに向けての課題

今回、基礎看護学実習 I 前に実施したシミュレーション教育による血圧測定や呼吸音聴診の反復トレーニングや、得られた情報をアセスメントし、指導者へ報告するという過程のトレーニングは吉川、藤野(2019)と同様、実習に役立つ有意義なトレーニングであったと考える。一方、トレーニングで行った「血圧測定」や「呼吸音聴診」では、座位になっている患者に実施していたが、患者からの情報収集シミュレーションでは、臥床している患者に血圧測定を実施している。そのため、実習での効果として[実習の私の受け持ち患者さんはずっとベッドで臥床になっている方だったから、寝た状態での血圧測定はとても役にたった]と述べていた。しかし、トレーニングで臥床している患者の血圧測定を実施した学生は、グループ代表のみであったため少ない。

実習では血圧測定や呼吸音聴診は患者が座位である場合に実施するとは限らないため、今後は臥床している患者や点滴をしている患者、難聴がありコミュニケーションがとりにくい患者など、状況設定を変更し、その状況下で参加した学生全員が、血圧測定や呼吸音聴取するトレーニング内容も考慮していきたい。

## V. 結語

A看護大学において、2年生前期の基礎看護学実習 I 前に実施された時間外トレーニングの効果を分析した結果、自己の課題解決や知識や技術の再確認することができたことによって、自信の獲得に繋がりと、【実習への心構えができた】。また、トレーニングすることによって、実習では落ち着いてスムーズに行動でき、患者の状態を適切に把握、アセスメントして指導者へ報告できるようになっており、【実習で効果を実感できた】ことがわかった。したがって、今回実践したトレーニングは実習を控えた学生にとって有意義であったと考える。今後も継続して効果的なトレーニングが開催できるよう、学生と情報共有し必要なトレーニング構成や内容を検討する必要がある。

## VI. 謝辞

本取り組みにご協力頂きました学生の皆様には心より感謝申し上げます。本研究における利益相反は存在しない。

## 引用／参考文献

- 藤野ユリ子, 吉川由香里. (2021). コロナ禍の経験をふまえたこれからのシミュレーション教育 福岡県実習補完事業の概要と実際 ひらかれた看護教育に向けて. 看護教育, 62 (6), 510-517.
- 船木由香. (2011). 基礎看護学実習における血圧測定技術の構成要素およびその習得状況の経時的变化の検討, 日本保健医療行動科学会年報, 26, 130-141.
- 東山新太郎, 芝崎有紀, 山内豊明. (2018). 双方向性を持つ呼吸音聴診技能向上のためのWeb教材

のユーザビリティ調査. ヒューマンケア研究学会誌, 9 (2), 51-57.

片野恵美子. (2020). 看護教育機関における臨地実習での学生のフィジカルアセスメント実施状況とその関連要因についての文献研究. 中京学院大学看護学部紀要, 10 (1), 1-11.

厚生労働省. (2002). 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書. 2021-10-21.  
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>

厚生労働省. (2018). 医療分野の情報化の推進について 医療分野の情報化の現状 電子カルテシステムなどの普及状況の推移. 2021-08-25.  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/iryuu/johoka/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/johoka/index.html).

文部科学省. (2019). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 2021-08-25.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2019/06/19/1418082\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2019/06/19/1418082_3.pdf)

長峰聖慈, 佐藤千景. (2018). 地域住民が患者役として参加した学習の成果. 武田総合病院医学雑誌, 44, 63-64.

笹野幸春, 渡邊和信, 影山孝子他. (2021). 基礎看護学の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきに関する学生の認識. 順天堂保健看護研究, 9, 41-51.

鈴木彩加, 佐居由美, 加藤木真史他. (2020). 臨地実習に向けたシミュレーション教育の試み 看護師への報告. 聖路加国際大学紀要, 6, 137-142.

寺山範子, 蛭子真澄, 大野かおり他. (2008). 臨地実習の技術経験実態調査からみた技術教育への一考察. 神戸市看護大学紀要, 12, 1-9.

吉川由香里, 藤野ユリ子. (2019). 看護大学1年生対象“血圧測定100本ノック!”トレーニングにおける学びの分析. 福岡女学院看護大学紀要, 10, 25-3.